

大山聖二候補生を憶う

—朝鮮出身同期生の軌跡—

宮澤 洋夫

予科12-9

航空5-4

(久喜市)



本稿は「写真集 将校生徒の軌跡」2012年9月28日発行、陸士60期第26中隊6区隊有志編に投稿された宮澤洋夫君の「大山聖二候補生を憶う」を転載したものである。(編集子)

1. 大山聖二候補生と偕に

<航空士官候補生教育>

硫黄島玉砕が報道された一週間後の1945年3月23日、東久邇宮殿下臨席の下に陸士60期(航空)の陸軍予科士官学校卒業式が振武台で挙行され、我々は航空士官候補生に任命された。翌24日我々195名は航空二次第五中隊(中隊長中谷達雄少佐(47期))に編入され、大山聖二候補生は第一区隊(区隊長池田二郎少佐(53期))に所属した。

大山聖二候補生

(予科26-6)

(航空5-1)



当日の引率指揮官山本健次郎第四区隊長(56期)の第一声は「只今より航空士官学の教育を行う」であった。3月27日の航空士官学校入校式は陸軍航空の開祖とされ

る徳川好敏(中将)校長の下で挙行された。4月7日「修武台」において第一回の同期生会が航空神社で開催され「我菊水の神鷲たらん」と決意を新たにした。

この日空襲警報と共にP51が2機来襲した。振武台ではB29の爆撃により区隊長以下同期生6名を含む12名が戦死されている。

直ちに学科授業が開始され、航空学、航空戦術、気象学、通信、爆撃弾道学、軍制等の専門学と付随する実習が実施され、5月には立川航空教育隊(東部561部隊)に於いて米軍機来襲下隊付教育が実施された。

6月15日には畑俊六元帥の視察があり、本土決戦断行への戦局と“諸君頼みますぞ”と訓話があった。6月26日には沖縄牛島部隊の総攻撃が報ぜられた。

7月に入り米軍の本土空襲は激化し、修武台は連日の如くP51、次いで艦載機F6Fの来襲を受けこれと対戦していたが、7月15日第一区隊長池田二郎少佐の転出に伴い中隊は三個区隊に編成替えとなり、第一区隊は三分されて大山聖二候補生等16名は第四区隊・区隊長山本健次郎大尉に編入された。区隊長は長身、体力に優れ、温容で、現地自活農耕作業、航空一次渡満に伴う校舎解体、運搬作業、坑道構築作業等に積極的に対処された。

然し、航空実技教育は行われなかった。

<修武台の終戦>

8月6日広島、8月9日長崎への米軍の原爆投下の被害が伝えられて、大本営は8月10日連合軍に対し「天皇制を変更しない」ことを条件にポツダム宣言の受諾を通告したが無視され、12日ソ連の対日宣戦布告により、戦局激変の情報が伝えられた。

「徹底抗戦」を主張する区隊長等は近衛師団、陸軍省等に働きかけていたが週番士官第四区隊長山本健次郎大尉は8月13日「君

側の奸を切れ」と訴えて決起を促した。

8月14日第五中隊の主力は三角兵舎建設のため仏子の金子小学校に移動した。

この日大本営はポツダム宣言受諾を決定し、終戦詔勅を8月15日にラジオで放送することになった。「徹底抗戦」を主張する第三中隊区隊長上原重太郎大尉は陸軍省少壮参謀らと共に森近衛師団長に「徹底抗戦」を申し入れ、「玉音放送録音盤」の交付を求めたが受け入れられず森師団長を殺害した。

8月15日正午講堂に正装集合した中区隊長、候補生等に終戦の玉音放送がなされた。突如航空一次区隊長本間英雄大尉は抜刀して電源コードを切断し、これ呼応する区隊長等と共に徳川校長に「徹底抗戦」を訴えた。その場は終息されたが本間区隊長らの呼びかけに応じ、第五中隊山本健次郎区隊長が準備したトラック二台に武器弾薬を積み、第五中隊残留候補生十数名が分乗し、第五中隊二区隊長西久保義人大尉の阻止を排して、近衛師団・陸軍省に押入り徹底抗戦を訴えた。

仏子小学校に分散していた第五中隊は正午校庭で終戦詔勅を拝聴し、炎天下に帰校した。直ちに連合軍の進駐に備え、教科書、秘密文書、所持品の整理焼却を実施し、今後の対応が論じられていたところへトラック二台が帰校した。

8月18日深夜、第三中隊区隊長上原重太郎大尉の航空神社社前の切腹自決により、修武台は沈静化し、「承認必謹」体制に移行した。大山聖二候補生はこの間の推移を見ていたが、何も語らなかった。

<大山聖二候補生秘話>

ポツダム宣言受諾に伴う連合軍による占領政策と武装解除への対処は整齊と進行していたが、これからの日本はどうか、国家再興はどうするか、天皇制護持は、等隊内で議論が交わされていた。

ところが予科同中隊の梅津健一郎候補生から秘かに、我が第五中隊の大山聖二候補生は朝鮮出身であり、朝鮮は戦勝国として独立するので、将校教育の粋を体得し、多数の軍事機密を修得しているのだから、生かして帰すことは許されない。彼の名誉のためにも航空士官候補生として死んでもらおうと隊内で議論されていることが知らされた。

そこで先ず区隊をまとめていた第4区隊岡田晟(予21)候補生の意見を聴くことを提案した。岡田候補生はその夜直ちに大山聖二候補生を航空神社に呼び出して話し合ったところ、大山聖二候補生は朝鮮には李王殿下を戴く親日派のある反面、親米指導者と親ソ指導者が入り組んでおり、これからの朝鮮は前途多難であることが語られ、日本の秘密は守り、士官候補生として恥じない行動をすることが伝えられた。岡田晟候補生は軍の秘密は大山聖二候補生以外からも洩れることがある。むしろ外国となる朝鮮に親日派がいることが必要であると考え決行取止めの申し入れをし、了承を得た。復員式当日には大山聖二候補生は離校していた。

2.大山聖二候補生を憶う

<韓国軍の建設への参加>

1945年8月15日、日本が連合国のポツダム宣言を受諾するに伴い、北朝鮮にはソ連軍、南朝鮮には米軍が進駐し、民族と国土が分断される状況下で建軍の作業が開始された。

ソウルに進駐した米軍は直ちに軍政を実施し、米軍政庁は南朝鮮に組織されていた中央人民委員会、朝鮮軍準備隊等を解散し、米軍の補助部隊として米軍式韓国軍の建設に着手した。その母体作りのため同年12月ソウルに軍事英語学校を開設し、日本軍

関係では陸士26期から60期までの卒業生、在學生304名、満州軍官学校(陸士留学)出身14名、学徒兵、志願兵出身33名、中国系22名が短期教育を受けて指揮官となった。既に帰国していた大山聖二候補生はこれに参加した。

1946年1月南朝鮮国防警備隊が創設され、第1期生110名が指揮官となり、4月第2期生が加わって米軍式韓国軍の母体となった。建軍の中核は日本陸士出身者であり、米軍はその指揮権を引渡した。

1948年8月南朝鮮に韓国政府が樹立され、李承晩が大統領となり米軍指揮官は顧問団となったが、引続き米軍は国連軍として駐留した。

他方、北の朝鮮民主主義人民共和国では、日本の植民地支配に反対して満州や国内で抗日ゲリラ闘争、独立運動を闘った金日成を中心として朝鮮民主主義人民共和国が成立し、朝鮮人民革命軍、光復会などの出身者を中心として朝鮮人民軍が建軍され、北からはソ連軍は撤退した。しかし、統一独立国家となる筈であった朝鮮は、38度線を中心として南北に分断されたままととなった。

<朝鮮戦争の指揮官として>

1950年6月25日未明、北緯38度線上で南北の武力衝突が起き、米軍(国連軍)の介入により内戦は国際間の戦争となった。当時、韓国軍は八師団(22個連隊)編成で、それに首都警備師団には機甲連隊が増設され、特に38度線に沿った三師団(原州・議政府・江陵)には砲兵大隊・工兵大隊が配備されていた。各級指揮官には大山聖二候補生等軍事英語学校・韓国陸軍士官学校卒業生が配置され、開戦前年卒業の8期生1263名は小隊長として配置された(その3分の1以上が戦死)。

第一段階は初戦の6月から8月にかけて

の朝鮮軍の進撃と米・韓軍の後退である。朝鮮軍は38度線一帯の侵攻から南下してソウルを陥し、更に洛東江対岸・釜山まで米・韓軍を追い詰めた。

第二段階は9月から10月にかけて米・韓軍の巻き返しの北進である。米・韓軍は9月15日仁川上陸の大規模作戦により戦力を増強して反攻し、朝鮮軍を撤退させ、更に平壤を占領し、10月下旬には朝中国境の鴨緑江に達した。

第三段階は11月上旬の中国志願軍の参戦と米韓軍の後退である。再び戦局は転換し、米韓軍は38度線を越えて南下後退した。マッカーサーの蒋介石軍投入発言、トルーマン米大統領の原爆使用声明があったが、1951年4月11日マッカーサー国連軍司令官は解任となった。

第四段階は1951年6月から1953年7月までの戦線膠着から停戦交渉への移行である。戦線は38度線一帯で膠着し陣地戦となっていたが、朝鮮軍の拠点「1212高地」を巡る攻防は、熾烈を極め世界の注目を浴びた。この時期に部隊指揮官大山聖二の戦死が報ぜられた。

1951年7月10日から戦闘と併行して開城で休戦会談が開始され、10月からは板門店に移して続けられ曲折を経て1953年7月27日停戦協定が成立し、3年間の戦火は止んだ。李大統領は「北進統一」「停戦反対」に固執したので、朝・中代表と国連軍(米国)代表により調印された。

戦争の結果は惨憺たるものであった。国連資料では参加戦闘員約200万、戦費250億ドル、人命被害総数115万9362名。うち韓国軍は戦死22万7748名、戦傷71万7083名、失踪4万3572名で総数98万8403名であった。

北朝鮮側の人的被害については公式発表はない。

朝鮮戦争の米韓に対する日本の協力は、

当時GHQ占領下にあったとはいえ、作業要員、輸送、技術、医療等あらゆる分野に及び、国連軍の前進補給基地、国連空軍の攻撃基地の役割を果たした。

指揮官大山聖二は“将”の礼で厚く葬られた。とりわけ、作戦資料の提供・計画の作成・実施・戦局を変えた仁川上陸作戦への参加等旧軍人の協力等も指揮官大山聖二候補生への挽歌となった。

朝鮮特需は日本経済復興の契機となり、治安維持のため創立された警察予備隊が現在の自衛隊に進展していることも追憶の記とする。